

Off Time

さ さやかな楽しみ



息抜きは食事とおしゃべり

忙しい毎日ですが、気晴らしになっているのは、食べること。「おいしいものを食べる会」と称して、助産師さんや同僚、後輩たちと3〜4カ月に1回、食事をしながらおしゃべりするのが、よいストレス解消になっています。

それと、ささやかなぜいたくが、当直明けのスターバックスコーヒー。医局のインスタントではなく、ね(笑い)。「もうちょっとがんばれば、リッチなコーヒーが飲めるよ!」とスタッフ同士、励ましあっています。



やさしい雰囲気のアーステーション

和歌山県立医科大学附属病院 産科・婦人科

県内唯一の大学病院、総合周産期母子医療センター。「お産難民、がん難民を作らない」をモットーに、地域住民に安心安全な医療を提供、ドクターヘリも導入し、県内全域をカバーしている。年間分娩件数は、正常分娩も含む約600件。産科はもちろんのこと、婦人科、とくにがん治療にも力を入れている。



和歌山市紀三井寺811番地1

<http://www.wakayama-med.ac.jp/hospital>

Role Model

後輩医師のお手本になるのが夢

教授の勧めもあり、昨年から診療の傍ら、大学院でも学んでいます。まだまだ未熟で、なかなか将来のことを考える余裕はないのですが、いずれは医師の後輩たちに「谷崎先生みたいなお医者さんになりたい」と思ってもらえるようになるのが夢ですね。

大学病院には、切迫早産や、さまざまな病気を抱えた妊婦さんがたくさんいらっしゃいます。そのため、食事や生活で我慢を強いることも度々です。「絶対安静にして、じっと横になってくださいね」なんて、本当は言いたくないのですが、元氣な赤ちゃんを産むためには必要なこと。誕生の瞬間に、すべての苦労は報われますよ!

若くてまだ経験も少ない私を信頼してくれて、「ありがとう」と言ってくださる患者さんたちの、助けになりたい。医師として、少しでも役に立てていると思えたときが、一番うれしいですね。



谷崎優子さん

(たにざき・ゆうこ)1982年生まれ。和歌山県立医科大学卒業後、附属病院での研修を経て現職。2011年4月より同大学大学院に進学、臨床と研究を両立している。

Happiness

“やりがい”と“喜び”を感じて

小学校4年生のときに、父が大腸がんになりました。無事回復したのですが、そのときに医学の力をひしひしと感じたことが、医者を目指したきっかけです。

産婦人科を選んだのは、手術が好きだったから。帝王切開など産科系の手術のほかにも、婦人科系の手術を数多く行っています。がんの場合は手術・抗がん剤・放射線と、さまざまな方法を組み合わせたトータルな治療もできる。すごく奥深くて、やりがいを感じています。それに産婦人科は女性医師が多く、結婚・出産しても働きやすい環境が整っています。

研修医として各科を回ったときの明るい印象にも、背中を押されました。日々「おめでとー!」と喜べて、母子が退院するのを笑顔で見送れる。こんな幸せな職場で、私も精いっぱい、働いてみたいと。

産科・婦人科ドクターから 妊婦さんへ

ほとんどの妊婦さんにとって、お産は一生に一度か二度しか体験しない一大イベント。初めてだと心配なこともあるかもしれませんが、「イベントを楽しもう」という気持ちで、リラックスして妊娠・出産に臨んでください。生まれたばかりの赤ちゃんを抱いたときの感動は、それまでの不安を吹き飛ばしてくれますよ。

【和歌山県立医科大学 産科・婦人科教授 井籠一彦先生】
(左の写真の前列右から2人目)

輝け★いのち
産婦人科へ
ようこそ!

誕生に立ち会う仕事に誇り 患者さんの「ありがとう」に応えたい

和歌山県立医科大学附属病院
産科・婦人科内助教

谷崎優子さん

和歌山県立医科大学附属病院
産科・婦人科助教

城道久さん

Duty

気が抜けない日々

普段は病棟の業務や当直が中心で、週1回、外来も担当しています。お産はいつ始まるかわかりませんし、大学病院なので多胎や合併症などハイリスクな妊婦さんが多く、常に気が抜けません。救急車搬送の患者さんを診たり、救急医の先生と一緒にドクターヘリ※1に乗ることもあります。その他、子宮筋腫などの婦人科疾患や婦人科がんの患者さんも担当しています。

「激務ですね」とよく言われますが、つらいと思ったことはあまりないんですよ。とはいえ、慣れるまではやっぱり大変でした。分娩中に赤ちゃんの具合が悪くなったとき、吸引分娩※2や帝王切開への切り替えなどを即座に判断できるようになるまでは、精神的にもキツかったです。今でも、お産のときはやっぱり緊張しますよ。

無事に出産を終え、お母さんが赤ちゃんを抱いて元気に退院していかれるときは、本当にうれしいですね。

※1 救急医療に必要な機器や医薬品を搭載し、医師が同乗して傷病者のもとへ向かうヘリコプター。現場や機内で必要な治療を行いながら患者を中後病院へ搬送する。
※2 金属またはシリコン製のカップを赤ちゃんの頭に当て、カップ内の空気を抜いて密着させ、柄を引いて赤ちゃんを引き出す緊急時の分娩法。

Bible

医局特製ミニ手帳をいつもポケットに

こんな日常ですから、休みの日はたいてい寝ているか、読書しているか……。社会派小説が好きで、よく読みます。

宝物は、入局してすぐに医局でもらった手作りの手引書「産婦人科医ミニ手帳」。今でも大切に持っています。研修医時代は、いつも白衣のポケットにしのばせて、すぐに見られるようにしていたんですよ。

和歌山は自然も素晴らしいけど、人柄も温かくて、とても住み心地のいいところです。ときどきは、景勝地や温泉めぐりを楽しんでいます。

Hope

病む人に寄り添う医師に

兵庫県の高校に在学中は、薬剤師を目指していました。残念ながら受験に失敗、そのころに祖父が亡くなり、それをきっかけに「病氣の人にもっと深く関われる医師になろう」と進路を変更しました。神戸大学の医学部に進み、卒業後に研修医として和歌山県にきました。

産婦人科医を志したのは、妊娠から出産までのダイナミックな体の変化に興味があったからです。ホルモン分泌の仕組みの探求から、がん治療に至るまで、幅広い分野を手がけられるのも魅力でした。

産婦人科医は、生命の誕生に立ち会える感動的な仕事です。世の中に求められている大切な仕事に就いたことに、誇りを持っています。

子育て今昔 ～和歌山の巻～

「我が子が生涯、食べる物に困らないように」と、生後百日前後に行われる「お食い初め」の儀式。お膳には、お頭付きの鯛や赤飯、煮物、汁物などが並びます。料理とともに欠かせないのが歯固めの小石。和歌山では、その小石に那智黒石を使う習慣があるとか。那智黒石は熊野地方で産出する真っ黒な石で、基石や硯に加工され、親しまれています。昔は那智勝浦や新宮市の海岸でも取れたそうです。



黒い光沢が美しい那智黒石



城先生、谷崎先生ってどんな人??

城先生は真面目で研究熱心な方。患者さんにも信頼されています。最新の治療法や検査法などに詳しく、私たちにも「こうしたらどうですか」と教えてくださるので、とても勉強になります。谷崎先生は若くてかわいくて、芯がしっかりした先生です。患者さん思いで、患者さんの目線で話をしてくださるので、人望も厚いですよ。

【和歌山県立医科大学附属病院 助産師一同】

